

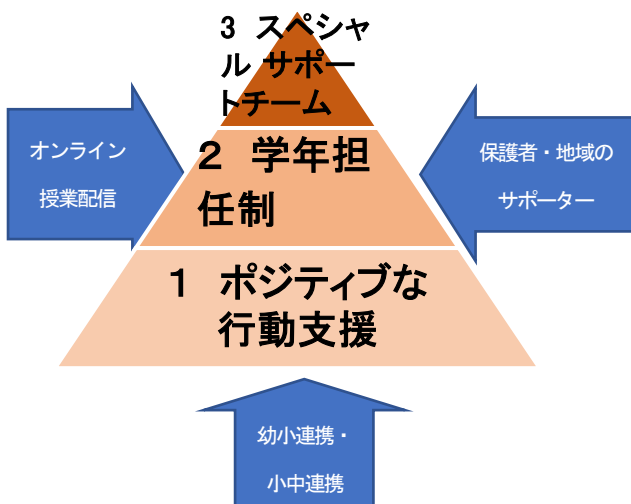
「誰もが大切にされる大庭小学校」をめざして

松江市立大庭小学校長 佐藤 淳

はじめに

今年度開校150周年を迎える本校は、松江市南部に位置する古代文化発祥の地にある。校区では国庁や正倉跡が発掘されており、多数の墳墓が点在する。縁結びの八重垣神社、国宝指定の神魂神社があり、現在はその中心に「島根県風土記の丘」が建てられている。

不登校児童の増加や特別支援教育の推進は、本校でも喫緊の課題である。特別な配慮が必要な児童及びその家庭・保護者も含め、本校に関わる「誰もが」大切にされる学校を目指す学校像としている。以下、本校学校経営の取組を児童への支援を中心に記す。下はその概念図である。



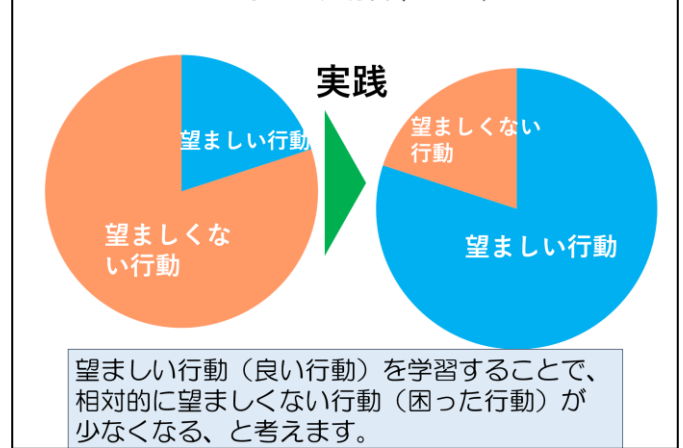
1 ポジティブな行動支援

同じ物事も考え次第でプラスにもマイナスにもとることができる。児童の行動も同様である。年度当初、特別支援コーディネーターによるポジティブ行動支援の演習を行っている。概略は次の4点である。①できない部分ではなくできていない部分に注目し、できている部分を増やす。②児童の望ましい行動を否定・禁止ではなく具体的な行動として指導する。例 走りません→廊下は歩きます ③行動を起こすきっかけを考えて事前に環境を整えておく。④行動を具体的に認めることで望ましい行動を強化する。

夏季休業前に初任者がこの研修がとても勉強になったと語ってくれた。児童へのかかわり方の基盤を作る研修となったようだ。

そもそも本校は私が着任した R4 年度時点で教職員の人間関係がとてもよく、教職員が児童を見る目が肯定的であった。この暗黙知を見える形にした学術に裏打ちされた共通理解は、本校での児童への関わりの基盤、「誰もが大切にされる学校」の第1段階の方途となっている。

ポジティブな行動支援(PBS)では



〈研修資料 参考：徳島県立総合教育センター〉

2 学年担任制

学校の教育目標達成のためには、その学校の良さ（リソース）を生かして課題の解決に取り組むことが必要である。本校では、上の職員間の良好な人間関係を生かして、ゆるやかな学年担任制に取り組んでいる。本校には毎年2～3名程度の新規採用者が赴任する。この新規採用に引き続く期間の教員とミドルリーダーの学年主任とを組み合わせた学年部とし、学級担任任せではない学年経営を行っている。

学年の実態に合わせての取組となるが、例えば、以下のようのものである。

- ①ローテーション道徳
- ②担当教科の交換
- ③習熟度別あるいは興味関心別等の学習集団編成
- ④給食指導のローテーション
- ⑤定期的な学年集会

ある学年主任に聞くところによると、当初は、学年担任制の取組を、煩瑣と感じたそうだが、取り組むにつれ、担任以外の児童の良さや学年部の同僚の良さに気づくことができたと言っていた。新規採用者等にとっても、自分ですべてを行わなくてはならないと思込まず援助要請の出しやすい形ではないかと考えている。

特に、令和6年度は、上の③の進展を目指して算数を横並びの時間割編成にしている。例えば、6年生の算数は月2・火1・水3・木2・金1というようにしている。これにより、単元によって、指導の個別化（習熟度）や学習の個性化（学習方法の選択）などを容易に行うことができる。どの学年にも少人数指導の加配を当てているので、3クラスを4学習集団編成にしたり、より手厚く支援が必要な集団をTTで行ったりと柔軟な対応ができるようにしている。これは学力差の大きさへの対策でもある。

また、令和6年度からは、1年生を入学当初仮学級制と

している。多数の幼児教育施設から入学してくる新1年生の実態を適切に把握することは困難であり、入学当初を仮学級とすることで、小学校教育への適応や新入生の人間関係をじっくりと観察することをねらった。6月には観察をもとに本学級を編成している。1年生で適切な集団を構成することは、有効な児童支援となると考えている。

上で「ゆるやかな学年担任制」と述べたのは、高学年教科担任制加配1名では、中学校のような教科担任制の実施は難しく、趣旨は共通理解した上でできる範囲で行うという意味で「ゆるやかな」としている。なお、学年部での共通理解を促進するため、学級経営案ではなく学年経営案を作成し、取組の指針としている。この取組が第2段階の方途である。

学年担任制については、1学年に複数の学級がある学校に赴任した時には、ぜひ取り組みたいと考えていた。学級による差を薄め、学年教職員集団としての良さをより生かすことができると考えたからである。新しい取組は、定着に時間がかかる。学年担任制についても3年間で次のように徐々に現在の形となった。

- 1年目 2学期から学年担任制施行。できることとできない原因を精査。
- 2年目 年度当初から学年担任制が取り組みやすい時間割の設定。学年経営案作成。
- 3年目 算数の時間を横並びに設定。総合的な学習の時間の探究課題を再検討

3 スペシャルサポートチーム

ここまでの取組は不登校対策でいえば全校児童を対象とした未然防止の取組である。そのうえで集団に入りにくい児童、集団の中で居心地が悪い児童もいる。そのために、生徒指導主任の分掌ももつ主幹教諭をリーダーとしたサポートチームがある。①子どもと親の相談員②サポートワーカー③にこにこサポートティーチャー④特別支援教育支援員⑤スクールカウンセラー⑥スクールソーシャルワーカー、以上、不登校、問題行動と特別支援教育など特別な配慮が必要な児童・家庭のためのスタッフである。

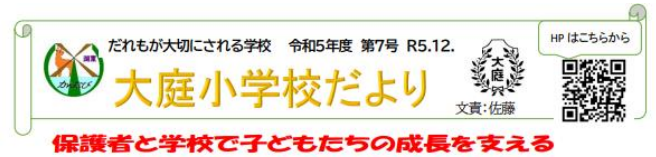
②のサポートワーカーは耳慣れないかと思うが松江市が配置する支援スタッフである。本校では、校内支援センター的な役割を担う相談室で、学校には来るが教室に入りにくい児童の対応を行っている。教室に向かう前の1ステップとしている児童もいるし、1日ここで過ごす児童もいる。

③のにこにこサポートティーチャーと④特別支援教育支

援員は、いずれも特別支援教育にあたり、③は県が配置し、本校では取り出しての個別の課題への支援を中心に、④は市が配置し、集団の中での支援を中心として児童の支援を行っている。

不登校（傾向）児童には特別支援教育の必要な場合も多く、特別支援教育コーディネーターも含めたサポートチームの連携が不可欠となる。サポートスタッフは基本的に非常勤なので、情報の共有をはじめ、生徒指導主任（主幹教諭）の役割は大きい。この取組が早期対応といえる第3段階の方途である。

学校に長期間来ることができない不登校児童については、外部機関と連携しながら対応となる。不登校については、いつでもだれにでも起きうるという考えのもと、保護者に事前に心構えをいただきたいと考え、学校だよりで特集した。「将来の自立に向けて長い目で見ていく」ことを家庭・地域に向けて発信している。



「個人面談」にお越しの皆様ありがとうございました。本校では、家庭訪問と2回の個人面談により対面でお子さんの成長をお話しています。学校と家庭、地域では子どもたちが見える顔は当然違います。人間誰もそうですね。子どもたちのいろいろな顔を知っていることは、かかわる大人にとって大切なことです。

時に、子どもたちは、大人から見て心配な様子を見ることがありますが、将来の自立に向けて長い目で見ていくことが大切です。以下、不登校について書きますが、これは、不登校はだれもがなる可能性があり、お子さんがある朝「学校に行きたくない」と言った時の大人の心の準備を考えてのことです。

Q1 不登校の児童はどれくらいいるのですか？

令和5年度の不登校の児童生徒数は、全国で29万9048人、うち小学生は10万5112人です。小学生は全児童の中で1.7%となり、この10年で5倍となっています。不登校児童は病気や経済的理由を除き年間30日以上欠席をした児童ですので、これに不登校傾向といわれる児童を加えると、その数はさらに多くなり、中学校では1割となる統計もあります。誰もがなる可能性があると言う理由です。

※「病気や経済的理由による者を除き、何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくてもできない状況にあるために年間30日以上欠席した者」を不登校児童生徒と文部科学省は定義しています。

Q2 不登校の原因は何ですか？

一つの原因とすることができない場合がほとんどです。「どうしていかないの？」と聞けば、何かしらの理由を子どもは言うかもしれませんが、それは氷山の一角で、本当のところは、本人にもわからない場合が多いです。保護者をご自身の養育に原因を感じられる場合がありますが、これもわかりません。心のエネルギーが落ちている状態といえます。

Q3 不登校になった子はどのように変わっていきますか？



左の「心のエネルギーのグラフ」をご覧ください。登校がすべてではありませんが、心のエネルギーがたまるには、一定の時間が必要です。横軸の時間は、様々ですが、今子どもがどの段階にあるのかを見定め、その段階にふさわしい支援をする必要があります。

〈令和5年12月学校だより抜粋〉

4 オンライン授業配信

ここからは、1～3の支援を支えるものについて3つ挙げる。まずはオンライン授業配信である。これは、コロナウィルスによる多数の出席停止者がいた時期に、授業をオ

ンライン配信したことから始まる。これを不登校児童が利用し、①家庭で視聴②学校内の別室で視聴③教科を選んで対面で授業に参加というように1年間をかけて、登校できるようになっていった。オンライン配信とはいっても、黒板が入るようにして撮影した映像を Teams で配信しただけである。それでも、新しい学級担任の顔を毎日見て、その声を聴き、学級の雰囲気を感じ、時折クラスメートが画面に向かって話しかけてくるという効果は大きかったのではないかと考えている。

オンライン配信については校長からのトップダウンの指示であったが、これは、前任校で行った臨時休業時のオンライン学習の経験が大きい。この時は、図書館で行う自習と同じようにオンラインに接続した児童が個々に学習に取り組んだ。どのような環境でも学びに向かう機会をつくることは校長の責務であると考えている。

5 保護者・地域のサポーター

次に保護者・地域のサポーターについて述べる。赴任した当時から地域学校協働本部事業による地域ボランティアはたいへん充実していた。校外学習の補助、家庭科の学習ボランティアなどは毎年行われており、ありがたく感じた。さらに地域の学校を地域の力で盛り立てていただくと考え、通常の授業の中での学習サポーターの募集を行った。

令和5年度、掛け算九九の暗唱など、サポートが欲しい場面で、試行した。今年度は、どのような場面にサポートが欲しいかを職員の希望を集約して募集をかける予定である。

学習の躓きが不適應の原因とならぬよう地域・保護者の力を結集したいと考えている。

6 幼小連携・小中連携

最後に学校間連携である。近年、低学年の児童の不登校が多くなっているようだ。幼児教育の比較的少人数の環境から小学校の多人数集団の環境への変化に困る児童もいるように思う。幼児教育で培った力を小学校で十分に発揮しにくいということもあるだろう。特別支援教育の学びの場の検討も小学校入学時が大きな決断となることが多い。

幼小の円滑な接続により児童が安心して自己発揮できるよう、次のような取組をしている。

①入学半年前の10月に新入学児童保護者対象に小学校体験会を実施。小学校生活や学びの場の説明、先輩保護者を交えての懇談、校舎案内など。

②校区内の7つの幼児教育施設と管理職会や担当者会を実施。5～6月頃に新1年生の授業公開。年度後半に当番園が年長児の保育公開。いずれもその後に協議時間を設定。

③夏季休業中を中心に小学校から園所を訪問し新入学予定児童の観察・情報入手。

④特別な配慮が必要な児童についての移行支援会議の実施。

⑤随時、幼児が小学校の施設を利用して小学校生活のイメージをつくる機会とする。小学校の遊具で遊ぶ、小学校の音楽会を体験する、小学校の施設を見学するなど。

⑥年長児が一堂に会して一緒に遊ぶ機会をつくる。

交流を通して、小学校と園所、あるいは園所同士が顔見知りとなり、目指すところを共有することができつつある。これには島根県幼児教育センターや松江市あるいは松江市小学校長会の幼小連携接続推進の取組が大きくかかわっている。幼児教育から総合的な学びや個別最適な学びについても学んでいきたい。

松江市では小中一貫教育に取り組んでおり、中学校区で学園制をとっている。本校の場合は湖東中学校と竹矢小学校とともに湖東かんなび学園となる。学園の課題として学力育成と不登校対策にプロジェクトとして取り組んでおり、中学進学が大きなハードルとまらない体制構築に取り組んでいる。学力育成プロジェクトの中でも多様な学びの在り方について検討しており、学園の職員全員に各校の授業を公開しあっている。

学校間の連携・接続を円滑に行うこともまた、本特集の趣旨に合致すると考えている。

おわりに

「誰もが大切にされる学校」とともに、本校でキーワードとしているのが、「自己選択・自己決定」である。本特集の「多様な学び」は、自分の人生をたくましく生きるために多様な学びの中から、自己選択・自己決定していく学びであるはずだ。これを上に述べてきた様々な取組で支えていくのである。目線を上げて、子どもたちや社会の未来を見据えて、学校経営にあたっていきたい。

島根県松江市立大庭小学校 ☎ 0852-21-4239